

1 2	知教連 (武豊町)	○武 豊 小 ^{ミゾ カミ} 溝上 将規 衣 浦 小 松井 涼莉 富 貴 小 鉄川 友陽 緑 丘 小 中 蘭 恵 武 豊 中 天野 美月 富 貴 中 川原 楓稀 武 豊 小 猪口 奈桜
-----	--------------	--

分科会番号	1 3	分科会名	能力・発達・学習と評価
-------	-----	------	-------------

自己の考えを深め、主体的に表現する児童生徒の育成 ～ I C Tを活用した対話的な学びと省察を通して～

1 主題設定の理由

武豊町の学校教育目標の指針にある求める子ども像に、「自ら学び、自分の思いや考えをはっきりと表現できる子ども」及び「自分の考えを表現したり、他人の意見を聞いたりして、自らを高め、周りとともによりよく生きようとする子ども」というものがある。社会が急速に変化し、予測困難な時代を迎える中、多様な人々と協働しながら課題を解決していく力が求められている。子どもたちには、自ら考えをもち、それを表現するとともに、友達との対話を通して考えを広げたり深めたりする力を高めることが重要である。

学習指導要領においても、「主体的・対話的で深い学び」の実現を通して資質・能力を育成することが求められている。そのためには、児童生徒が自分の考えをもち、対話を通して多様な考えに触れ、自らの考えを見直したり深めたりする学習過程を大切に授業づくりが必要である。特に、授業における「振り返り」は、単なる学習内容の確認にとどまらず、自らの考えの変容や学び方を見つめ直し、次の学びへとつなげていく「省察」の機会として重要である。「何を学んだか」に加え、「どのように考えが変わったか」「次にどのように生かしたいか」という視点をもって振り返ることが、より深い学びにつながると考える。

本町においては、一人一台端末の整備が進み、I C T機器を日常的に活用できる学習環境が整ってきた。I C T機器は、一人一人の考えを可視化し、互いの考えを即座に共有・比較することができるため、対話的な学びを充実させる有効な手段となる。また、学習の過程や成果を記録・蓄積できることから、自らの考えの変容や学びを振り返る「省察」を支え、次の学びへとつなげることも期待できる。このように、I C T機器は対話と省察の双方を支える学習ツールとして大きな可能性をもっている。

以上のことから、本町が目指す子ども像の実現に向け、I C T機器を効果的に活用した授業づくりについて研究を進めていくことにした。

2 研究の構想

(1) 目指す児童生徒像

- ・自分の見方・考え方を広げたり深めたりすることができる児童生徒
- ・自分の思いや考えを、主体的に表現する児童生徒
- ・自分の学びの過程や思考の変容を見つめ直し、次の学びに生かそうとする児童生徒

(2) 研究の仮説

仮説1 I C T機器を授業に応じて活用して、児童生徒の考えを可視化し共有することで、多様な視点を取り入れながら自己の考えを広げたり深めたりすることができるだろう。

仮説2 ICT機器を活用して自らの学びの過程や考えの変容を振り返る省察の場を設定することで、自分の学びを客観的に捉え、次の学習へ生かすことができるだろう。

(3) 研究の手だて

A (仮説1に対して)

- ・授業の課題や目的に応じて情報共有アプリケーション等を活用し、児童生徒一人一人の考えを可視化・共有する場を設定する。また、授業前後にアンケートを実施し、「ICT機器を活用することで友達の考えが分かりやすかったか」「自分の考えを深められたか」などの項目から、ICT機器を活用する効果を検証する。

B (仮説2に対して)

- ・授業後に、「学習を通して考えがどのように変わったか」「友達との対話からどのような気づきがあったか」などの具体的な視点を提示して授業後アンケート（振り返り）を行う。これにより、児童生徒が自分の学びの過程や思考の変容を具体的に捉え直す「省察」の場を設定する。

3 研究の実践と考察

(1) 実践1 小学3年生

① 教科 道徳科 命あるもの全てを大切に D 生命の尊さ「ヒキガエルとロバ」

② 単元のねらい

本単元では、どんなに小さな生命であっても、一つしかないかけがえのないものであることを理解し、大切にしようとする心情を育てることをねらいとしている。児童はこれまでの経験から、「命は大切だ」ということは理解しているものの、日常生活で動植物に触れる機会の減少や、ゲーム等のバーチャルな世界での遊びの増加により、命がたった一つしかないかけがえのないものであるという実感がもちにくくなっている。そこで、ウェビングカードやロイロノート・スクール（株式会社Loilo、以下「ロイロノート」と表記）の共有機能を活用して、友達と考えを交流することで多様な考えに触れ、自分の考えを深められるようにした。

③ 授業の様子

導入では、ヒキガエルの写真を提示すると「気持ち悪い」「触りたくない」など、見た目の印象から感じたことを率直に発言する姿が見られた。その後、教材を読み進め、「アドルフたちはどんな気持ちで石を投げていたのだろう」「ロバの行動のよさはどこにあるのだろう」と問いかけることで、命について多面的に考えるよう促した。

主発問では、「命」から連想することをウェ

いのちについてイメージをふくらませよう。



【資料1：ウェビングカード】

ビングカードにまとめて思考を可視化させた【資料1】。その後、ロイロノートの共有機能を活用して友達の考えを共有させると、「自分にはなかった考えがあった」「自分や友達の命も同じように大切だ」など、多様な視点に触れて自分の考えを見直したり広げたりする児童の姿が見られた。

振り返りでは、「どんな命も一つしかない」「小さな生き物にも自分たちと同じ命だから大切にしたい」など、考えが深まったことを自分の言葉で表現する児童が多く見られた。また、「学習を通して自分の考えがどのように変わったか」という視点で問いかけると、「友達の意見を聞いて、動物も人も傷つけない気持ちが強くなった」と記述するなど、自分の考えの変容に目を向ける児童も見られた。

④ アンケート結果

授業後のアンケートでは、「授業の中で自分の意見や考えをもつことができた」に肯定的な回答が 88.9%であり、多くの児童が主体的に考えながら学習に取り組んでいたことが分かった【資料 2】。

また、授業前のアンケートで、「授業中に、自分の意見を伝えることができる」に肯定的な回答が 72.5%であったのに対し、授業後のアンケートで「自分の意見を伝えることができたか」に肯定的に答えた児童は 92.5%へと上がった。本時を通して、「自分の意見を友達に伝えることができた」と実感する児童が増加したといえる。

さらに、「ロイロノートの提出箱をみんなが見られるようにすることは、友達の意見を知るよい方法であるか」についてアンケートを取ると、肯定的な回答が 88.9%となり、約 9 割の児童が視覚的な意見の共有方法を有効だと捉えていた【資料 3】。以上のことから、ICT 機器を活用した意見共有は、自分とは異なる考えに触れ、自分の考えを表現する手だてとして有効であったと考えられる。

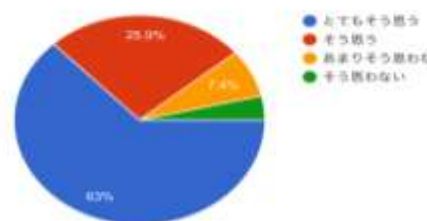
⑤ 考察

本時では、ウェビングカードで自分の考えを整理した上で、ロイロノートを用いて全体で共有・比較させたことにより、自分との共通点や相違点に気づき、多面的・多角的に考える姿が見られた。意見交流の場面では、友達の考えを参考にしながら自分のカードに新たな考えを書き加えたり、振り返りで「友達の考えを見て考えが変わった」と記述したりする児童が見られた。また、発言に苦手意識のある児童も ICT 機器を活用して思考を可視化したことで、友達の意見を参考にしながら自分の考えを表現することができたと考える。

アンケート結果からも、多くの児童が主体的に考えをもち、表現できたと実感していることが分かった。さらに、振り返りの場面で、考えの変容に着目させる具体的な視点を提示したことで、児童が自らの学びの過程や自分の考えの変容したところに目を向ける様子が見られ、考えを深める省察の場として有効であったと考える。

1. じゅぎょうの中で、自分のいけんや考えをもつことができた。

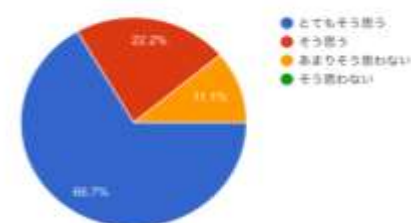
27 件の回答



【資料 2 : アンケート 1】

ロイロノートのてい出箱をみんなが見られるようにすることは友達の意見を知るいいほうほうであると思う

27 件の回答



【資料 3 : アンケート 2】

(2) 実践 2 中学 1 年生

① 教科 英語科 「疑問詞」

② 単元のねらい

本単元は、疑問詞を用いて日常の疑問について尋ねたり答えたりするコミュニケーション能力を高めることをねらいとしている。単に日本語を英語に置き換える機械的な作業にとどめず、自分自身が相手に尋ねたいことやその応答を自分事として表現させることが重要である。言語が相手に伝わって初めて機能することを意識させ、ICT 機器を活用して作成した英文を可視化・共有し合ったり、生徒同士で対話したりすることを通して、自己の表現や考えを正しく深められるようにする。

③ 授業の様子

本学級の生徒は、授業前のアンケートにおいて「自分の意見や考えをもつことが得意」と答えた割合に対し、「自分の意見を伝えることができる」と答えた割合が低く、表現することに慎重な実態が見られた【資料4】。しかし、実際の授業では、英語の習熟度にかかわらず、友達と関わろうとする積極的な姿勢が見られる。

そこで、自信をもって発言できるように、対面での対話を行う前にタブレット端末へ英文を入力させ、全体・グループで画面共有させた。テキストとして視覚的に共有することで心理的ハードルが下がり、英語が得意でない生徒も友達の表現を参考にしながら正しく意見を読み取ったり、自分の英文を修正したりすることができた【資料5】。端末上で可視化・共有し、自信をもたせた上で対話活動へつなげたところ、より主体的に英語で伝え合おうとする姿が見られた。

振り返りでは、「友達の英文を見て表現の幅が広がった」「最初は自信がなかったけれど、自分が話した英文が分かってもらえて気持ちが変わった」など、対話を通した自身の学びの変容に目を向ける記述が見られた。

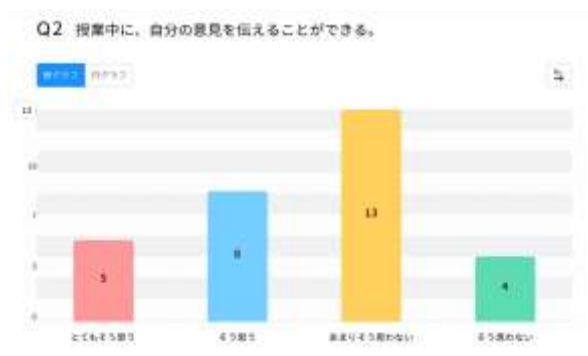
④ アンケート結果

実践後のアンケートでは、「タブレット端末を使うと、自分の考えをまとめやすかったか」という問いに対して肯定的な回答が約80%、「タブレット端末を使うと、友達の考えが分かりやすかったか」に対しては肯定的な回答が約90%となった。これらの結果から、タブレット端末を活用した意見の可視化・共有は、発信への抵抗感を和らげるとともに、友達の考えや表現を容易に捉え、自身の表現を深める上で有効であったことが分かった。

⑤ 考察

本時では、対面での対話活動の前にICT機器を活用して英文を可視化・共有させたことにより、視覚的な根拠をもって友達の意見と比較・参照することが可能となった。これにより、発言に不安を抱える生徒も根拠をもって対話に参加でき、対話的な学びを実現することができたと考える。また、自分の考えを画面上で整理し、友達との共有や対話を通して見直したことで、英語表現の向上や学びの変容を実感させることができた。

振り返りにおいて、自身の表現の変化や対話の成果を客観的に捉えさせる視点を与えたことは、主体的に学びに向かう態度を高める「省察」の場として有効に機能したと捉えている。



【資料4：授業前のアンケート】



【資料5：タブレット端末での活動】

(3) 実践3 中学2年生

① 教科 道徳科 C 公正、公平、社会正義「あなたの声、心に届け」

② 単元のねらい

本単元は、周囲と異なる不安や、ありのままの自分でいられない理由についての話し合い、誰もが自分らしく生きられる社会の実現に向け、自分にできることを考えようとする心情を育てることをねらいとしている。福祉について学んだ1年次の学習を踏まえ、同調圧力に流されず、場面や状況に応じて多角的に捉える力を育てることが求められる。そこで、ICT機器を活用した意見交流・共有を通して多様な視点に触れさせ、自己の考えを深められるようにした。

③ 授業の様子

授業前のアンケートにおいて、「道徳の授業中に自分の意見や考えをもつことが得意である」と答えた生徒は87.9%と高数値を示したものの、実際の授業で挙手をして発言する生徒は限られるという課題があった。そこで、全員が自分の考えを表現できるよう、ロイロノートを活用して一人一人の考えを可視化・共有し、発言しやすい雰囲気づくりを努めた。

導入では、「みんなと同じ方がよいと思うことがあるか」という授業前のアンケートの結果を電子黒板に提示した。「ある(42.4%)」の理由として「1人だけ違った場合、自分の考えは特殊だと思ってしまう」「みんなと同じ方が安心する」などが挙げられた。一方で、「ない(57.6%)」の理由として「みんなと違うとみんなとは別の視点から見るができると思うから」などが挙げられた。これらを共有したことで、生徒はどちらの立場にも納得し、多角的な視野で課題と向き合う姿が見られた。

展開では、発問に対する考えをタブレット端末上で提出させた後、近くの生徒同士との対話をして全体共有を行った。

振り返りでは、「誰もが自分らしくありのままにできるように、あなたにできることはなんだろう」という問いをすると、「まず自分が自分らしく生活する」「自分の価値観を押し付けない」など、対話を通して深まった自分の考えを具体的に記述していた【資料6】。また、みんなと同じ方がよいと感じるのはどんなときか」という問いに対しては、「集団の団結力が必要なとき」「学校や規則がしっかりしている場所」など、場面に応じた柔軟な見方・考え方へと深化・変容している様子が見られた。

- ・多様性を認める
- ・自分にとっての相手らしさを相手に押し付けない
- ・お互いに認め合う
- ・相手の許容範囲外のあだ名や小馬鹿にした言い方をしない
- ・過度なお願いを無理やりやらせない
- ・お互いに自分らしさを発揮しながら相手のことを考える

まず、自分が自分らしく生活して他の人も自分らしくいられるような雰囲気をつくる。

【資料6：生徒が記入したカード】

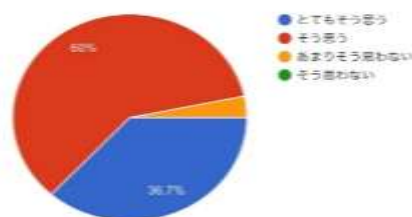
④ アンケート結果

授業後アンケートでは、「タブレット端末を使うと、友達の考えが分かりやすかったか」に対し96.7%、「友達の意見を聞いて、自分の考えに自信をもったり変化に気付いたりできたか」に対し83.3%の生徒が肯定的に回答した【資料7】。

意見を視覚化して分かりやすくすることにおいてICT機器は非常に有効的であることが分かった。

8. タブレットを使うと、友達の考えが分かりやすかった。

30件の回答



【資料7：授業後のアンケート】

⑤ 考察

本時では、事前アンケートの集計結果やロイロノートを活用して生徒の思考を可視化したことで、友達の多様な考えに触れ、同調圧力に対する見方・考え方を多角的に広げることができた。特に、友達の意見を参照しながら「場面による考え方の違い」に気付くなど、協働的な対話を通して自分の考えを広げていく様子が見られた。

また、振り返りにおいて思考の変容や新たな気付きに着目させたことで、生徒は「集団と自分」の関係について、自分の考えがどう深まったかを客観的に見つめ直すことができた。これは、自らの学びの過程や変化を認識し、主体的な態度へと繋げる「省察」の場として効果的であったと考える。

4 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

思考ツールやロイロノートを活用して一人一人の考えや根拠を可視化・共有したことで、発言に慎重な児童生徒も心理的ハードルが下がり、主体的に発信することができた。また、他者の視点の比較・参照を通して、友達の意見を取り入れ、自分の考えを修正・再構成するなど、多角的・多面的に思考を深めることができた。アンケート結果においても、約9割の児童生徒が視覚的な共有方法を有効だと捉えており、ICT機器を活用することは、対話の質を高める手だてとして有効であったと考える。

授業後には、「対話を通して自分の考えがどのように変わったか」「友達の意見からどんな気付きがあったか」といった具体的な視点を提示して振り返りを行った。これにより、児童生徒は単なる知識の確認にとどまらず、思考の変化を画面上や記述で客観的に捉え直すことができた。自分の学びの過程や成長を具体的に自覚させるアプローチは、自己の考えを見直して深める「省察」の場として機能し、主体的に次の課題に向かおうとする態度を高められたと考える。

(2) 今後の課題

第一に、ICT機器上での思考の可視化を「対面での対話活動や口頭表現」へと繋げる指導の工夫である。アンケート結果や授業の様子から、画面上で友達の意見を読み取ったり自信をもったりする児童生徒が増加した。一方で、挙手をして進んで発言したり対面で議論を深めたりすることに対しては、抵抗感や課題を感じている児童生徒が見られた。今後は、画面上での意見共有を単なるゴールとせず、それを足がかりとしてペア・グループでの対面による話し合いや、全体での話し合いへと段階的に高めていく指導が必要である。

第二に、目的に応じたICT機器の精選と、より精度の高い検証方法をしていく必要がある。本研究では1時間の授業内での思考の変容に焦点を当てて検証を行ったが、単元全体や他教科において、深まった考えや表現力がどのように継続・活用されているかについては十分とは言えない。ICT機器を使うこと自体が目的にならないよう、学習場面に応じた指導法を精選するとともに、児童生徒の変容を長期的に捉えていく必要がある。